文教大学女子短期大学部研究紀要45集，(21)－(28)，2002

小栗判官伝承の近世的展開
――『小栗実記』覚え書〈1〉――

田川邦子

（一）

『小栗実記』は奥付によれば一七三五年、つまり「享保二十乙卯歳五月吉祥日」の刊。作者については内題には「畠山先生著述／穂積先生参考」とあり、奥付には「伏見　畠山先生泰全著述／摂州穂積先生以貫参考」とあって、内題奥付は一致している。全十二巻十二冊の藍色表紙の大本で、近世小説史上では、「読本様式成立に先立つ読本前史の一部を占める(注1)」〈仮作軍記〉と呼ばれるジャンルに属するとされているので、今はそれに従っておくことにした。

ずっと後の時代になるが、文化十年（一八一三）から同十二年にかけて出版された小枝繁作・葛飾北斎画の長篇読本『小栗外伝』は、あきらかにこの『小栗実記』に依っている。両作品の比較検討は是非ともなされなければならない課題であるが、これは後の機会に譲るとして、読本前史に位置づけられるこの作品『小栗実記』の諸々の特徴の中に、何を見出すことができるか、今はこの辺に焦点を絞りたい。

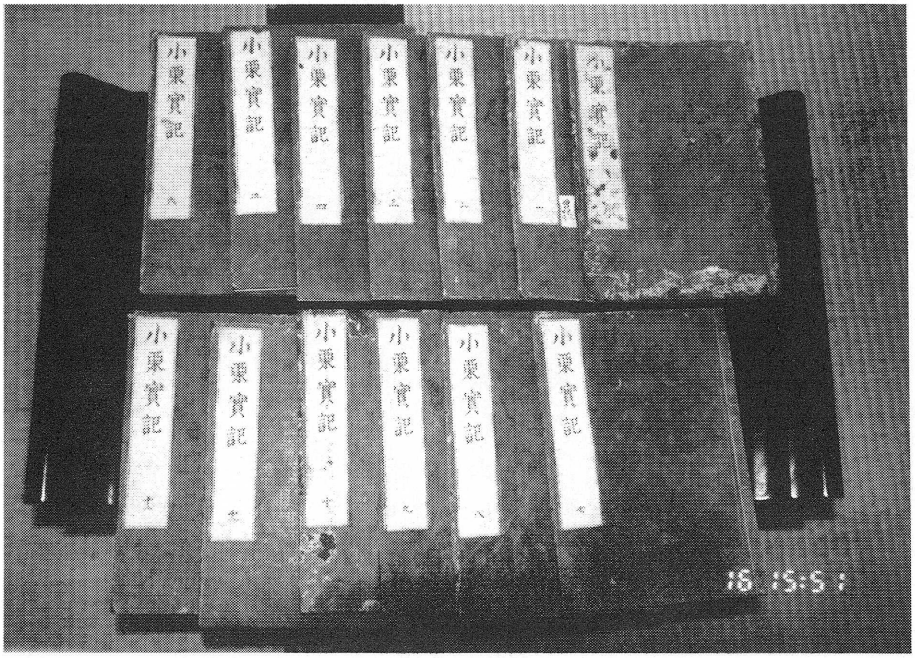
まず第一に興味を惹かれるのは、穂積以貫がこの『小栗実記』の成立に何らかの形で関わっているらしいことである。「らしい」という言い方は曖昧すぎるかもしれない。内題奥付共に穂積以貫先生「参考」とあるからには、作品成立に関わった事実を明確に表明しているわけで、この事実を前提に『小栗実記』の創作方法を考えてみなければならないからだ。

中村幸彦氏は次のように言う。

以貫が名を示して参加した『小栗実記』において、如何なる参加の仕方であったか。この種のものに多く処々に「按ズルニ」として、本文に参考となる事実や意見を述べる。少くとも、恐らくこの処は以貫の担当と思われて、かなり高度の知識や論が披露されている（「穂積以貫逸事(注2)」）

また「参考」、「再考(注3)」については「各章の文末に、内容についての史実や補記を付したり、一種の批評の如きを加えたことを指すらしい」（「穂積以貫年譜略(注4)」）とも言っている。

実際『小栗実記』全十二冊には短いものはほんの一行、長ければ数丁にわたる「今按スルニ」または「按スルニ」とある添書きは気になるところである。しかしこれはこの種の長編の伝奇的読本にはよくある例で、何も『小栗実記』だけのものではない。話主である筆者が要所要所に顔を出し、これまで記述した事柄に補足を加えた



『小栗實記』（花応院〈藤沢市西俣野〉所蔵）

り、弁解したり、読者に注意を促したりなどさまざまで、読み手にはこれがなかなか面白く有益なのである。ここから作者の創作態度や方法、その心理などを垣間見ることができるからである。

『小栗実記』全十二巻のうち、最初に「今按ズルニ」が出て来るのは一巻の終りに近い所で、照天ノ姫の乳母侍従が入水して果てる、その説明である。ここには『新編鎌倉志』の名が挙げられ、「光伝寺の前の川を世に侍従川と云」うのは此の事に依ると説明される。ストーリーの筋書きの種明かしなのである。

これに始まり巻之四に一つ、巻之五に一つ、巻之六に二つ、巻之七に三つ、巻之八に二つ、巻之九に二つ、巻之十に五つ、巻之十一に二つ、巻之十二に三つと、合計二十二個所になる。どちらかいえば後半に多いのは、「照天の松熏（ふす）べ」「美濃青墓の長」「小栗の餓鬼病」「熊野の湯の峯」など先行の小栗判官伝説に重なる部分が多くなるからである。既成の伝説伝承にどのような姿勢で向き合うか、もう少し踏み込んで言えば、新しい創作にそれをどう利用し生かしていくかが問われるところである。創作である以上作者にとってこの点が何より大きな問題になるところであるから、その部分に関係する作者の側の弁明であるともいえる。その内容から見て本文に深い繋がりがあるのは無視できないので、穂積以貫が独断で書いたものとは思われない。筆を執ったのは以貫であるにしても、内容的には両者の合意合作という性質のものではないかと思われる。

ということは作品を書くに際しても、泰全は集めた諸史料や自作のアイデアを以貫に示し、書き上げたものに以貫の意見を求めるということもあったのではないかという想像にも連らなるのである。

以貫と泰全が実際にはどのような関係にあったのか、今にしては

よく分らないことが多いのだが、これも中村氏の『年譜略』によれば、以貫は二十三歳で伊藤東涯の門に入るまでは伏見に住む父親と同居していたというから、伏見という土地が二人を結びつける機縁になっていたことは確かなようである。二人の年齢はかなり離れているようだから、まず以貫の父親で和算学者の穂積与信と畠山泰然の交際から始まっていたのかもしれない。

畠山泰全が残した歴史物語は全部で三作品。『小栗実記』の前には享保六年に『三楠実記』があり、元文二年（一七三七）には『大友真鳥実記』が出版されている。この『大友真鳥実記』は『浄瑠璃文句評註難波土産』（元文三年序）の巻之三「大内裏大友真鳥」の評注に、「其実記は近年板行なりし大友真鳥軍記といへる軍書にくはしく記せり」と書かれているその作品を指していることに間違いはないだろう。

『大内裏大友真鳥』は享保十年（一七二五）九月、大阪竹本座初演の時代浄瑠璃で、竹田出雲作である。好評を博し何かと話題になった作品であるが、万象亭（森島仲良）が『反古籠』で

大友真鳥の浄瑠璃の趣向は以貫一夜にて立てたる趣向にて、竹田出雲へ授しとなり。道行は自作なり。故に委しく註を加へしなり。

と書いているのは有名なはなしである。

穂積以貫は芝居好きで竹本座に出入りし、近松門左衛門とも親交のあったことは周知の通りで、『難波土産』にも近松を讃美する漢詩を載せている。

竹本座は近松門左衛門が亡くなった直後のことでもあり、竹田出雲が作者として自立を迫られる一つの転換点の時機にあった。『難波土産』に以貫がどのような形でかかわっていたかはよく分らないが、万象亭の言葉を信じれば、『大内裏大友真鳥』のアイデアは以貫から出たことになり、彼が近松亡き後の竹本座そして座元の竹田出雲に協力の手を差し延べていたことになる。そして元文二年には畠山泰全の『大友真鳥実記』である。

『大友真鳥実記』の出版は『小栗実記』から二年後になるが、その間に作者の泰全は亡くなっていたらしい。未完の草稿として残されたものに「穂積先生の令弟尚古庵氏」が筆を継ぎ完成させたと序文にはある。中村氏はこの尚古庵を二人いた以貫の弟のうちのどちらかであろうと推定している。ともかく畠山泰全は穂積以貫はもとより、その一族とも非常に近い所に居た人だという気がするのである。

『大鳥真鳥実記』にも以貫の創意工夫の跡は必ず隠れているのではないかという推測も成り立つが、既に享保十年の時期に泰全の未完の草稿があり、以貫がそれを手がかりに一晩で『大内裏大友真鳥』の趣向を立てたとも考えられ、ここにもまた両者の微妙な関係が想像される。

『難波土産』の「発端」に記される近松の言説には

惣して浄るりは人形にかゝるを第一とすれば外の草子と違ひて、文句みな働を肝要とする活物なり。殊に歌舞伎の生身の人の芸と芝居の軒をならべてなすわざなるに、正根なき木偶にさまざまの情をもたせて、見物の感をとらんとする事なれば、大形にては妙作といふに至りがたし。（句読点は筆者）

とあるように、浄瑠璃と実録的読物では創作原理・方法がまるで異なる。近松は「文句」、つまり表現方法について述べているよう

に見えるが、人形劇に相応しい表現を可能にするためには構想と趣向、つまり大もとの筋書きの適不適が大前提になるのは言うまでもない。『大内裏大友真鳥』と『大友真鳥実記』を単純に比較しても何も見えてこないかもしれない。しかし『小栗実記』の以貫と泰全とのかかわりを模索するためにも、大友真鳥物の両作品を慎重に検討してみることは必要であろう。小栗物と同じように大友真鳥物も先行作品に古浄瑠璃を持っているので条件は非常に似通っているのである。

しかしこの問題に深入りすれば横道に逸れるので、別の機会に譲ることにし、今は『小栗実記』に戻ることにしたい。

（二）

まず先行作品であるが、竹本座で好評を博した『小栗判官車街道』（作者竹田出雲、文耕堂）は元文三年（一七三八）八月初演であるから、『小栗実記』より二年後れて世に出ている。

現在の私たちの目に入る限りでは室町時代の戦記物『鎌倉大草紙』があり、その他は説経浄瑠璃の正本（延宝三年〈一六七五〉正本屋五兵衛板のものと、佐渡七太天豊孝正本のものがある）と、御物絵巻物、奈良絵本、それに草子の形態を持つ『おぐり物語』（中・下巻のみ）、寛永初年の古活字本（下巻のみ）などがある――以上『説教正本集　第二』とその解題――。

歌舞伎では現存しているものに『小栗鹿目石』（元禄十六年七月市村座）、『小栗十二段』（元禄十六年七月森田座）があるが、それ以前にも外題のみ伝わるものが残り、小栗物は比較的よく上演される人気のある出し物であったようだ。現存の二作の内容は、よく知られている説経浄瑠璃を素材に趣向立てをし、当世風喜劇風にアレンジしたものといえる。

元禄十一年〈一六九八〉竹本座上演の浄瑠璃に『当流小栗判官』がある。作者近松門左衛門とあるが、『声曲類纂』や『外題年鑑』では宇治加賀掾に属するものに見做しているので、もっと古い作品かもしれない。流人小栗が池の庄司をお供に連れて、いきなり相模の国に登場するのであるが、この出だしの軽さは神々の御本地から語り出す説経節とは大きな違いである。

横山家の草刈りの童たちが登場し、そこに敵を討ち損ね深傷を負う後藤佐衛門が追われて登場、小栗は後藤を逃がすため、機転で横山家の草刈りの童が連れている牛を斬り、その血のしたたりから後藤が逃げたように見せかける。結局牛が横山邸に駆け戻り、後藤の敵山形兵衛がそれを追って邸内に入り大騒ぎになるのであるが、小栗が横山邸に入り照手を見染めるきっかけは、後藤を助けるために牛を斬ったということが原因である。

このような偶然性を発端とする出だしの軽さは歌舞伎的とも言えるが、宗教性から乖離し同時に歴史的背景にもあまり関心を示さない、人間中心の事件の展開がこの作品の特徴でもある。

従って大筋は説経に據っているが、深泥池（みぞろがいけ）の大蛇も閻魔大王も出て来ない。

脇役の鬼王鬼次の兄弟が劇中では大きな存在として浮かび上り（第三）、照手姫を助けた後「よしなき人に奉公しかかるうきめ」を見る人生を歎き、出家して藤沢上人の御弟子となる。ここに始めて藤沢上人が登場するのである。

このように古浄瑠璃や伝説では脇役でしかない人物が、後の作品では大きく成長し、主役的位置を占めて行く例は近世演劇では珍しいことではない。この場で表出される人間的苦悶は「よしなき人に奉公」しなければならない下級侍の立場のつらさである。これに結びついて藤沢上人が登場して来るのも、この時代の人間的状況に見合っている。

餓鬼阿弥蘇生譚は説経を踏襲するが（第四）、兄弟の出家に結合連続する形で話が繋がっていく。蘇生に立ち合うのも、熊野の湯に入れることを提案するのも藤沢の上人であるが、その意を受け容れまず実行に移すのは出家した二人の兄弟である。もちろん餓鬼阿弥が主人照手姫の夫の小栗であることを二人は知らないままである。

一方鬼王に助けられた照手姫は「松葉のふすべ」も転売の話もなく、いきなり青墓の万屋の長の宿の水仕「ひたち小萩」となって現われる（第四）。青墓の君の長と照手の間に交わされる緊迫感溢れるやり取りは、説経節では意志の強い照手の人間像として高く評価されるが、『当流小栗判官』の場合照手はもう少し女っぽい。鏡に向い浅ましい姿になり果てた自分に絶望し、出家して菩提の道に入ろうとさえする。長の女房にあらぬ疑いをかけられ嫉妬され、夫婦喧嘩に巻き込まれそうになったりと、すこぶる人間臭いのである。この場面は後の『小栗判官車街道』にも生かされている。

こうして見てみれば、芸能の分野で書き継がれる小栗物と、実録・軍記・長編読本の世界で扱われる小栗物とでは系列が全く異なることを、いろ応認めておく必要はありそうだ。断わるまでもなく、説経節〈おぐり判官〉は芸能の世界から生まれ出たものである。

歴史上の小栗氏は、常陸国の御厨小栗の領主で応永二三年〈一四一六〉上杉禅秀の乱に荷担して敗北、その後鎌倉公方足利持氏に滅ぼされる一族である。小栗氏興亡の舞台は常陸国であるはずなのに、説経節では流人として流されるとき、母親の領地という理由で常陸国が選ばれるに過ぎない。物語の舞台としてはたいして重さを置かれていないのである。説経節の作者の念頭には、京都中心の世界の構図があり、常陸で起った動乱にはほとんど関心を示さない。これは『当流小栗判官』でも同じである。

このように浮遊しつつ変形していく物語を、歴史の世界に繋ぎ止め、再生させようという新たな試みがなされるのは不思議ではない。『小栗実記』はそれを志向する作品であるといち応見做してよいであろう。「実記」という謂はここから来ている。

しかしこれは近現代の多くの歴史小説がそうであるように、史料を遍く渉猟しその間隙や余白に作者の想像力を活動させるのとは大分異なる。〈歴史〉とひと口に言っても、それは観念の固まりに化した残像としてあるのではなく、人間の行動が集積する生きた場としての〈歴史〉であるから、当時の人々は〈時代〉という概念でそれを把握していた。〈時代〉はさらに〈世界〉によって切り取られ、ここに具体的な人間の行動が浮上して来るのである。

当り前のことかもしれないが『小栗実記』の〈世界〉は「おぐり」である。ここで「おぐり」というとき、すでに諸々の人物像が浮上し、綾なす行動が展開し、且つ完結する一つの世界を意味している。それをまず〈時代〉の側から捕えなおし、当代の人間の視線の延長の上に多くの人間的共感を引き出すものをつけ足して加工していく。

和田正路が「今の世に、古戦等の講釈として人を風靡するあり。

今の人の気象風俗より、古へを思へる弊あり」（『異説まちまち』）というのはこのことで、「近代の曽我勳功記、義経勳功記、真鳥実記、小栗実記など、人をまどわす」とし、これらを浄瑠璃の類と同等視し「上留理本講釈、犬のくそ説経、近代記録」とまで記している。

近代記録と浄瑠璃は発展の経路を見ても別系統のジャンルであるが、自らも浄瑠璃の製作に参加したといわれる穂積以貫が、同時に『小栗実記』の成立にも関わっていたことを思えば、両者には同質のものが底流していることは確かで、それが当時の庶民に喜ばれたのであろう。「なぐさみ」を旨とする浄瑠璃の手法と同じものが、実録や講釈の世界にも浸透し世に風靡していたのである。

『小栗実記』は室町時代の初め、将軍足利尊氏が、関東支配のために、次男の足利基氏を鎌倉管領に任じ、上杉憲顕をその執事にして関東の政事を預ける事情から説き起す。事実これ以降の関東の動乱の多くは鎌倉管領足利家と、京都の将軍家の対立、さらに内部では管領足利家と執事上杉家との軋轢が原因にあるから、この時代独特の政事的仕組みを明らかにしておかなければ話は始まらないわけである。

小栗家も鎌倉公方足利持氏と、上杉家との対立抗争に巻き込まれて亡びるのであるが、その端緒になるのは応永二三年〈一四一六〉年の上杉禅秀の乱である。しかし『小栗実記』はこれには触れず、この乱の後日から出発する。

京都の将軍義量が十九歳の若さで後継者を残さずに死んだとき、義量の叔父に当る青蓮院義円を還俗させて義教将軍とした。これが足利持氏の不満に火をつける。〈僧侶を還俗させ将軍の後継者に任じるとは何事ぞ〉というのが表向きの非難であるが、鎌倉菅領足利家から将軍の後継者を出してもおかしくないはずというのが持氏の本音である。東国で兵を挙げ京都に対し一戦に及ぼうと主張する持氏に君臣名分論を立てて諫言し、不興を蒙るのが、常陸の国の領主小栗満重である。管領持氏に諫言し得る立場ともなれば並の大名ではおかしいから、「元来は将軍家ノお附人」だと作者は割り書きで注を加え、小栗家の地位の格上げをもくろんでいる。

この〈付家老〉制も、また持氏の「何ゾ我子ノ春王丸、安王丸二人ノウチヲ取テ京都の将軍に任ゼザラン」の考えも、当代の制度に齟齬していない。当時は紀州家から入った八代将軍の時代である。同時に小栗満重の「京都将軍ハ主君ナリ。鎌倉ノ菅領ハ臣下ナリ」の名分論も、近世の社会通念として正統性を保持している。

むしろこれに反論する山名氏治の「京都将軍ト鎌倉菅領ハ主従ト云ベカラズ、両将軍タリ」の方に、時代を超える何物かがあるように見えるが、この種の急進論は近世では異端であり、〈悪〉である。山名・一色を悪人にすることにより、「謀叛を起し、鎌倉の御下知に背」いた（『鎌倉大草紙』）とされる歴史上の小栗一族の名誉を回復しようという狙いが『小栗実記』の発想にはあるのである。

小栗重満が足利持氏に鎌倉立退きを命ぜられ、親族譜代の面々を集め評議するとき、「君ヲイサメテ忠ニ死スル」は見事であるが、「小栗ノ氏ヲ絶サン事ハ先祖ヘノ不幸」との論が一座を支配する。家の名跡を絶やさないとする〈孝〉のモラルは、君への〈忠〉と並び近世人には重いテーマであったが、〈忠〉を取るか〈孝〉を取るか、この選択が重くのしかかるのは、誠実な家臣が主君に見離され

たときである。『小栗実記』ではこういう苦しい選択の場面を、重満とその子助重の別れの場にもう一度繰り返し描いている（巻之二）。

この時は選択を迫られるのは息子の助重で、小栗城で父と生死を共にするのを願っても父はそれを許さず、先祖への〈孝〉のため身を逃れ三河の国へ落ちよと命じるわけだ。軍記や実録では最も重みのかかる重要な場面なのである。

鎌倉を立退くについての評議の場では、一族のうち誰か一人を鎌倉に残し、家名の存続をはかろうというのであった。そのため満重の叔父の「正豊」と「重秀」、弟の「重英」の三人が籤を引く。引き当てたのは重英で「弟ハ孝ノタメニ残リ、兄ハ忠義ニ其身ヲ損ス」と、兄弟で〈忠〉と〈孝〉を分担し合うという発想である。

序文の後に載せる「平姓小栗系図」は、作者が自分の仕組んだ物語を読者に理解させる目的で作ったものと思われるから、小説的な潤色である。小栗氏については当時どのような系図があったかは分らないが、続群書類従（第六輯上）に載る「小栗系図」では「出自常陸」として繁盛から始まる。これは「常陸大掾系図」の陸奥守鎮守府将軍平繁盛に当るだろうから、小栗氏が平氏あることは間違いない。この「小栗系図」の片隅に、共に「常陸介」として「満重－助重」父子が載り、『新編鎌倉志』にはこの助重が、荒馬を乗りこなし照姫と想愛になったと『鎌倉大草紙』に云う小次郎のことであろうと書いている。しかし当然のことながら、満重の叔父の「正豊」、「重秀」、弟の「重英」の名などは何処にも見当らない。架空の人物である。

一方照天姫については『小栗実記』には「源姓照姫系図」なるものを載せている。これは「佐竹系図」（続群書類従　第五輯上）を借用し、その末端に「女子」として「名ハ照姫」と記したものである。新羅三郎義光の流れを汲む家柄であるから、源氏の名門ということになる。小栗判官助重と照手姫の組み合わせは名門源氏と平家の取り合わせでもあるという、作者の念入りな趣向立てであろう。

兄の重満に別れ鎌倉に止まる重英のその後の物語には、筆者は相当苦労した跡が見えるが、果して成功していると言えるかどうか、この辺は『新編鎌倉志』をもとに話を構想しているところである。

重英の妻の侍従はもとは照天姫の乳母であるが、盗賊（後にこれが横山と分る）に襲われ、姫の母親は殺され、姫も行方不明になっている。侍従は照天姫の行方を尋ね、姫の母君の敵を討ちたいとの宿願があり、照天姫の守本尊を大切に所持している。重英との間に一子万千代があるが、これが夫婦の子ではない。後で分るのであるが、小栗判官助重が娥（カホヨ）という美女に生ませた子なのであった。

重英は我が子（実は甥）の万千代の将来を思い、母の侍従と共に三河へ逃れるよう指示するが、幼くても武士の子である万千代は父と運命を共にすることを望み駄々をこねて聞き入れない。侍従は已むを得ず、霊験あらたかな照天姫の守り本尊を万千代に与え、一人三河国へ立退く用意をする。その時

彼ガ真実ノ母ナラバ、火水の底マデモ汝ガ命ヲタスケントコソハカラフベニキ、サスガ継母ノ心ツヨク、汝ヲ助クル義理一ヘンニ、本尊ノ利生ヲ語り、生死サダメヌ軍場ヘオモムクヲ振捨テ帰リシ無得心。継子ヲ悪ムト云フ古語ニ思ヒ合サレ……」

という、万千代に語る夫重英の言葉を立聞きしてしまう。絶望し

た侍従は此世に長らえることの無意味さを覚り、入水自殺を遂げるのである。

筆者は「今按ズルニ」で、

光伝寺ノ前ノ川世ニ侍従川ト云ト、鎌倉志ニ云ルハ此事ナリ。

とか。

又照天姫ノ守本尊ノ観音ハ今鎌倉ノ専光寺ノ本尊ニテ、今ニ三十三年目ニ開張アリト、鎌倉志ニモミヘタリ。

などと記し、『新編鎌倉志』に記す地名や伝承を手がかりに、新たな小栗説話を構想しようとする意図を披瀝している。

本物の照天姫より先に、護り本尊が出て来てしまうところなど、後追いの作り物語の特徴がよく出ている。（未完）

注1＝浜田啓介「仮作軍記の方法」（『近世小説・営為と様式に関する私見』）所収

注2＝『中村幸彦著述集（第十一巻）』

注3＝『享保以降大阪出版書籍目録』には「再考穂積伊助」とある。

注4＝注2の前掲書

－　付記　－

この小論は本学短期大学部の共同研究「『小栗判官』説話の形成と展開」の研究成果の一部である。

尚貴重な蔵書の閲覧をお許し下さった藤沢市の花応院に、厚く御礼を申し上げたい。